

佐藤智好・さくら氏牧場（北海道足寄町）の事後調査報告書

1. 経営の取り組み内容

佐藤牧場は平成18年度全国優良畜産経営管理技術発表会に『「多額負債」からの脱却と「ゆとり」経営の確立』と題して参加し、農林水産大臣賞・最優秀賞に輝いた。今回の事後調査は受賞後1年弱の訪問で、この間経営の取り組み内容に変化は見られないことから、ここでは現在の経営の取り組み内容、成果について述べることにする。

現在の経営の取り組み内容に先だって、放牧飼養導入前の経営の推移についてふれておくと次のようである。

佐藤牧場は昭和50年に土地面積拡大を求めて現在地に移転入植後、離農跡地を取得して自宅周辺に農地を集積するとともに、売上高を増やすために濃厚飼料多給による高泌乳生産に取り組んだ。しかし、乳量は増加したものの、疾病、廃用が多発し、治療費や育成費の増等により生産費が増加し、思うような経営成果を得ることが出来ず、負債が経営を圧迫するようになった。そうした中、放牧酪農に出会い、さらに平成8年ニュージーランドの酪農視察を通して「風土に根ざした集約放牧は収益に結びつく」と確信し、当家を含む負債問題を抱える農家3戸、労働過重に直面する4戸で「足寄町放牧酪農研究会」を組織して夫婦単位で放牧酪農の研修に取り組むとともに、平成9年に集約放牧酪農技術実践モデル事業を活用して牧道、牧柵や給水施設を整備して集約放牧へ飼養方式を転換した。

現在、佐藤牧場は経営主（57歳）夫婦と長男（27歳）の家族労力3名で、経産牛57頭を飼養する酪農専業経営である（表1）。

土地面積は借地、購入で自宅周辺に集積し、現在草地91ha（うち借地9ha）、成牛換算

表1 経営概況

経営形態	酪農専業経営
労働力	経営主(57歳)夫婦、長男(29歳)、 労働換算2.6人、労働換算1人当たり平均2,202時間
飼養頭数	経産牛57.3頭、育成牛32.1頭
土地面積と 土地利用	草地91ha（借地9ha）、成牛換算1頭当たり面積124a 採草専用地37ha（フェシ-・赤クローバー・白クローバー混播）2回刈り・ラップサイレージ、採草放牧兼用地25ha（フェシ-・赤クローバー・白クローバー混播）－5ha ：1番草採草、8/上～10月放牧利用、20ha：1,2番草採草、9/末～10月放牧利用、放牧専用地29ha－内8haは育成牛・乾乳牛専用－（フェシ-・ペレニアライグラス・メドフェスク・白クローバー混播）、搾乳牛放牧地は21牧区で5月～10月放牧（5～10/中は昼夜放牧。牧区利用間隔は5～6月15日程度、7月以降20～30日）
個体乳量と 出荷乳量	経産牛1頭当たり乳量7,382kg 出荷乳量420.4千kg

1頭当たり1.2haを確保している。草地は採草専用地37ha、採草放牧兼用地25ha、放牧専用地29haに分けて利用し、採草専用地は2回刈りで、1番草の一部を乾草（約3ha）する以外、全量をラップサイレージに調製している。放牧地専用地は、8haが育成牛・乾乳牛

専用で、残る21haを搾乳牛の放牧に当てている。搾乳牛専用放牧地は、短草利用することで嗜好性、消化率を高め、栄養価の高い牧草を採食できるよう、1牧区1haに区切って毎日牧区を移動し、5月から10月まで放牧（5～10月中旬までは昼夜放牧）している。また、放牧専用地の牧養力が低下する夏季以降は、採草放牧兼用地5haを1番草刈り取り後に8月上旬から10月まで、さらに20haを2番草刈り取り後の9月末から10月まで、放牧利用し、採食量の確保と放牧専用地が過放牧にならないよう管理している。

放牧期間中は青草以外に粗飼料を、5月から8月は乾草2kg程度/日・頭、ビートパルプ約2kg、9月以降はグラスサイレージ約10kg、ビートパルプ約2kg給与している。また、非放牧期間はグラスサイレージを飽食、ビートパルプ約2kg給与している。そして、濃厚飼料給与量は、放牧期間は1～6kg/日・頭、非放牧期間1～8kg、年間平均4.3kgに抑えている。

2. 経営成果

濃厚飼料多給・高泌乳追求から集約放牧による低投入型酪農へ転換して約10年経過し、その成果は以下のようである。

①集約放牧・短草利用による高栄養の自給飼料の利用により、濃厚飼料給与量を大幅に削減し（平均給与量はH8年6.7kg/日・頭→H18年4.3kg）、TDN自給率は67%（H8年47%）に達している（表2）。そのため、経産牛1頭当たり年間乳量は7.4kgと決して高い水準ではないが、飼料効果4.7（H8年3.3）と濃厚飼料利用効率が極めて高く、乳飼比（育成牛込み）は19.5%で低く抑えられている。

②しかも、自給飼料は放牧利用による経費削減等により、TDN1kg当たり27円の低コストで調達している。

③さらに、放牧飼養により牛が健康になり、疾病が減少し、供用年数が伸びている。現在、平均産次数は3.7産で、5産以上が1/4を占めている。そのため、乳牛の減価償却費減→生産原価が削減されているのみならず、初妊牛販売収入も増加している。

④以上のような結果、生乳1kg当たり生産原価は54円と低コストに抑えられ、所得率41%の優れた成果を上げている。

⑤また、放牧導入前に比べて、飼養管理時間の削減（飼養給与や牛舎清掃作業等の軽減）

表2 経営成果の推移

項目	H8	H13	H14	H15	H16	H17	H18
経産牛飼養頭数（頭）	50.6	54.7	57.9	51.6	53.3	54.4	57.3
出荷乳量（千kg）	421	417	451	436	441	425	420
経産牛1頭当たり乳量（千kg）	8.3	7.6	7.8	8.4	8.3	7.5	7.4
牛乳売上高（百万円）	31.6	32.3	34.5	33.8	32.7	32.3	30.6
乳飼比（経産牛）（%）	27.6	22.6	16.6	19.9	20.8	21.6	17.9
飼料効果	3.3	3.7	4.3	3.9	3.9	3.3	4.7
TDN自給率（%）	46.6	56.6	62.3	56.5	54.6	61.3	67.1
TDN1kg当たり生産費（円）	40.7	23.6	24.9	29.0	25.4	30.6	26.6
生乳1kg当たり生産費（円）	65.7	49.0	45.8	51.0	52.4	58.6	53.5
所得率（%）	23.4	44.3	42.7	45.0	37.4	28.8	40.6

表 3 平成18年末現在経産牛産次構成

産次	1産	2産	3産	4産	5産	6産以上	計	備考
頭数(頭)	9	12	9	11	3	12	56	平均産次
割合(%)	16.1	21.4	16.1	19.6	5.4	21.4	100	3.73産

や疾病牛多発による獣医師待ちのロス時間や精神的ストレスが無くなり、労働負担が20～30%減少し、楽しんで仕事ができるので、ゆとりを持って作業に従事でき、牛のみならず人間も健康になったことが実感できるようになった。その結果、以前は経営のあり方を考える余裕がなかったが、現在は「人は人らしく、牛は牛らしく」、「牛の幸せは人の幸せ」を経営理念として経営に取り組んでいる。

⑥さらに、放牧飼養に転換し、「経済的」、「時間的」、「精神的」にゆとりある経営を実現したことが、経営主が長男への就農を要請し、また長男が就農を決断した際の大きな判断材料となっている。その結果、平成13年に長男がUターンして就農し、後継者が確保された。

⑦佐藤牧場の取り組みを参考に、過去5年間に5戸が放牧を取り入れて新規就農している。そして、うち3戸が「足寄町放牧研究会」に参加し、研究会構成員は10名に増えている。また研究会は、毎年6月に各農家を巡回し、現場を観察しながらのフィールド研修を継続しているが、平成18年の農協合併を契機に町内放牧酪農家で構成する足寄町放牧酪農協議会結成後は、協議会構成農家へフィールド研修参加を呼びかけ、情報交換の輪を広げている。

3. むすび

佐藤牧場は濃厚飼料多給・高泌乳追求から土地条件を活かした低投入型の生産構造に転換し、「経済的」、「労力的」にゆとりある家族酪農経営を作り上げている。自らの飼料生産基盤を活用した持続性のある草地型家族酪農経営の一つのあり方を示す事例として評価することができよう。

全国農業改良普及支援協会 関澤竜朗